

宮城県漁業協同組合連合会第三代会長  
全国漁業協同組合連合会第四代会長

## 菊田 隆一

曇りなき知性と人の結合で、  
理想の漁業をつくる

【きくた りゅういち】

---

- 1904(明治37)年 7月7日、階上村  
(現気仙沼市)に生まれる
- 1939(昭和14)年 階上村助役
- 1946(昭和21)年 宮城県水産業会理事
- 1952(昭和27)年 宮城県信用漁業協同組合連合会会長
- 1958(昭和33)年 宮城県漁業協同組合連合会第三代会長
- 1971(昭和46)年 全国漁業協同組合連合会第四代会長
- 1988(昭和63)年 12月25日死去

## 故郷と時代、そして災害

気仙沼市波路上の地福寺からは、岩井崎の海が望める。東日本大震災が起きるまで風景の手前には集落が広がっていたが、津波が暮らしの痕跡を消し去ってしまった。だから、海の眺めにも温かみがない。

寺の門前には一九六五（昭和四〇）年の三陸大海嘯七〇回忌法要に際し、菊田隆一が中心となって建てた『海嘯記念碑』がある。碑は幸い流失を免れたが、ほかは流され、行方が分からないという。

この一八九六（明治二九）年の明治三陸大津波により階上村明戸では、全八九戸のうち八六戸が流失し、住民五八八人のうち四三三名が死亡。集落のほぼすべてを消し去った大津波は、人々の心にも大きな傷跡を残した。

七〇回忌回向の日、宮城県漁業協同組合連合会（以下県漁連）のリーダーとして故郷の海に向かう菊田の胸にはどんな思いが去来していたか。

彼の足跡を追うとその歩みは、戦後、民主団体として成長した県漁連の歴史そのものだということが分かる。まさに県漁連の成長を支えた人。その努力を養ったのは「故郷」と「時代」であったが、その歩みを邪魔するように「災害」が幾度も横たわることになる。

## 学問を修め、ふたたび故郷の海に向かう

菊田隆一は明治三七年、階上村波路上（現気仙沼市波路上）に生まれた。

明治三陸大津波から八年後である。当時、父の倉之助は村長を務めていて、尋常高等小学校の設置や凶作救済事業などで功績を残すが、そうした父の働きは、のちに隆一の進路に影響することになる。子どものころは、波路上から大島まで潮境の海を泳ぎ渡ったなど放胆な逸話がある一方で、勉学も人より秀でた。

一九二六（大正一五）年、菊田は二二歳で仙台の第二高等学校に入学する。当時、高等学校の就学は一六歳からで、二〇歳を過ぎての入学は異例だ。それ以前は階上小学校の代用教員をしていたというから、働きながら進学を目指したのだろう。学籍記録からは、大学入試資格検定に合格して入学したことが分かる。その試験に合格するのは「駱駝が針の穴を通るより難しい」とされたので、苦学の形容さえもどかしいほどの努力だった。

二校卒業後は東北帝国大学（現東北大学）法文学部に進んだ。同学部は、当時東北帝大で最も新しい学部だから、門を叩いた菊田の心は、最高学府で最新の学問を学ぶ高揚と誇りに満たされていたに違いない。

だが、それほど学問にこだわったのはなぜか。

明治の末から昭和にかけて階上村は貧しかった。とくに菊田が生まれたころは凶作

が続き、故郷を見限り北海道に移る者もいた。父、倉之助の凶作救済事業は、これに対応するものだった。一方、漁業は磯物が中心で、ノリ養殖も湾内のほかの浜より劣った。

『気仙沼市史』では昭和初期の階上村を「極度の節約でもなおかつ貧しい」と断言しているが、菊田はそんな故郷のために学問を修めたいと考えたのか、あるいは純粹に知識への憧れがあったのか。

昭和八年三月、菊田は東北帝大を卒業する。ちょうどそのとき、昭和三陸地震が発生し津波がふたたび村を襲う。菊田は最高学府で最先端の思想、文化に触れながら、都会で活躍するような華やかな進路を選ばなかったが、幼いころに聞いた津波の恐怖と戦慄がその津波でよみがえり、帰郷を決意したのかもしれない。

津波による階上村での人的被害は最小限で済んだが、ノリの柴建ては壊滅した。しかし漁民は被害を乗り越え、昭和一年に新しいノリ養殖法を導入、昭和一六年には生産額が日本一になり、「海苔王国」と呼ばれるまでに復興させた。

この間に村の助役を務めた菊田は、共同販売を前提にした競争入札を提案、仲買による買い叩きを防ぎ、ノリの取引価格向上に貢献した。そしてこうした実績が、のちに全県でのノリの共同販売導入につながっていく。

## 戦後の新しい漁業秩序をつくる

戦時中に宮城県水産課に勤務した菊田は、終戦の翌年に宮城県水産業会（以下県水）の理事になる。

県水は、戦前に誕生した宮城県漁業組合連合会（以下旧漁連）の後継団体である。戦争の長期化で協同組合としての機能を失っていた旧漁連を、昭和一八年、戦時状況に合わせて改組した。しかし終戦後、水産業団体から行政官庁の権限がほぼ排除されることが決まり、組合組織はふたたび民主的な活動ができることになった。

菊田が県水の理事になったのは、戦時組織の古い殻を脱ぎ捨て、羽化しようとするそのときだった。

一九五〇（昭和二五）年一月一四日、民主化を掲げた水産業協同組合法と漁業法の改正によって県漁連は誕生した。菊田は設立世話人代表に選ばれ、獅子奮迅の働きをした。彼はその晩年も水産業協同組合法のすべてを諳んじることができたというが、そこからもこのときの努力が分かる。

こうして誕生した県漁連だが、『宮城県漁連五十年史』によれば、生まれながらにして病弱だった。

理由は戦争によって漁村の暮らしが疲弊していたこと。ゆえに会員からの出資が十分でないことや、前身の県水の負債を引き継いだことなどがある。結果、県漁連は創

立の翌年に、農漁業協同組合再建整備法の適用を受けることになる。

ようやく生まれた新しい組合が、順調に育たないことに菊田はじりじりした。誕生に関わった者として専任し、成長を見届けたい思いもあっただろうが、その能力を頼る声は多く、昭和二七年には、宮城県信用漁業協同組合連合会（以下信漁連）の会長に就任し、漁業経営の課題に取り組むことになる。

信漁連での最初の仕事は、戦後の新しい漁業制度での漁業権への理解を得ることだったが、旧来の漁業権を整理し、新しい漁業秩序をつくることに反発する者もいた。

「おれの漁場はそんなカネじゃ渡せない」

そう突つ張る猛者たちをなだめ、ともに漁業を支え合う大切さを説き、まとめるのも菊田の仕事だった。

そんな矢先に、津波がまた漁業を襲う。三月に十勝沖地震、一月にはカムチャツカ半島沖地震が発生し、カキいかだやノリ養殖施設などが被害を受けた。津波被害からの復旧対策も仕事に加わり、菊田の苦労は続いた。しかしその一方で、立て続けの津波被害は、はからずも海に向かうものたちの連携を育んだ。自然災害に立ち向かうには漁協と漁民が一体にならなければならない。そんな機運が盛り上がり、協同運動を支えた。

## 再建のときを襲った津波

昭和三十三年二月、菊田は県漁連の会長に就く。設立から九年目を迎えていたが、組織は健康体にはほど遠かった。設立間もないときの整備計画はすでに達成したが、財務内容は悪化していて、新たな整備促進法で再建を図ることになった。

菊田は、真に健全な組織として理想の漁業をつくることを目標に、本丸ともいふべき難題に挑んだ。

このころ専務理事として菊田を支えた萩尾堅が再建計画について話している。ここでは、漁連は「漁民に協力を押し付けているわけではない」と断った上で、「漁連の経営を他人事のように考えず団結すべき」こと。そして計画達成のために「漁連事業を全利用してほしい」と訴えている。すなわち各々が独善的に漁業を行なうのではなく、連携した系統運動こそが県漁連を立て直し、漁業を育てるとしている。

萩尾の言葉通り、県漁連も身を削った。人員削減、給与改訂、経費節減を断行した。さらに事業対策でノリ、ワカメなど浅海養殖に注力したことが功を奏し、計画から四年で八千万円の利益を計上し、一〇ヶ年の再建計画を四年で達成させた。

このころ菊田がノリの共販やワカメの養殖事業を推し進めたのは、経営が不安定になりやすい沿岸漁業の基盤を整えるためだが、そこには津波で幾度も壊滅的な被害を受けてきた故郷への思いがあったに違いない。そしてこの尽力が、宮城県の養殖漁業

の繁栄につながっているのである。

昭和三五年、故郷に念願だった波路上漁港が完成した。これは財政難にあえぐ村に代わり階上村漁協が主体となって整備を進めたもので、全国初の取り組みに菊田は計画当初から尽力した。このころは高度成長の影響で県漁連の再建も順調に進み、漁業も故郷も自身も、まさに順風な日々だった。

そんな成長の流れを止めるように、南米チリで発生した地震が津波を起こし沿岸を襲った。昭和三陸大津波以来の大災害。県内の水産被害は二一億円以上。前年には伊勢湾台風に襲われたばかりだった。漁港には船が打ち上げられ、漁民は呆然と立ち尽くすしかなかった。

チリ地震津波の翌日、昭和三五年五月二四日の新聞記事には、沿岸漁民の救済を訴える菊田のコメントがある。

「政府が根本的な救済策を行なわない限り、多くの沿岸漁民は二度と立ち上がれないだろう。これまでのようにスズメの涙ほどの融資ではとても手ぬるい。(中略) 思い切った助成金をさすべきだ」

菊田はすぐに行動した。同二七日から東京で開かれる全漁連の総会に問題を持ち込み、各方面へ陳情を重ねた。

この日の新聞の見出しは『融資より助成を 県漁連が政府に運動』とあるが、それは菊田と被災した漁民たちの、ぎりぎりの願いであったに違いない。



若き日、二高と東北帝大に学び、故郷を豊かにしようとした青年の志は、四〇年近い歳月を経て、被災した故郷の人々の願いを全国に届け、故郷・宮城の漁業を救おうという決意に変わっていた。それはある意味、組合人としての集大成であり、これまで背負ってきたものの大きさを思えば、陳情の言葉もしぜんと激しくなった。

菊田らの運動を受けた政府は、特別立法により漁業施設や漁船の高率補助など最大限の援助措置を講じた。

## 人の社会的結合を追い求めて

その学歴のせいか、教員を務めたためか、または地域を牽引した実績の所以か、彼を知る階上の人々は、いまでも「菊隆先生」と呼ぶ。県漁連会長、全漁連会長と上の立場になるほどその足は故郷から遠のいたが、年に一度か二度、漁協事務所に顔を出した。迎える側は皆、直立不動だったが、本人はいつも笑顔を絶やさなかったという。新人職員であろうと分け隔てせず、相手の名に「君」か「さん」をつけて呼んだ。

小柄で少し太め。おだやかな物腰は、先生の呼び名が意外にも感じられたが、やはり威厳はあった。

一方で、信念の強さも人一倍だった。チリ地震津波の前年、菊田は『階上村史』に序文を捧げている。その冒頭に、漁業のために尽くした菊田の凝縮した信念を見るこ

とができる。

「人は孤立して生存し得ざる存在であり、必ずや社会的結合を為さねばならぬであろう。従って人の人たる所以は結合にありと断ぜざるを得ない。」

昭和の初めからいまに至る漁業の歩みは、津波など災害との闘いの歴史であり、戦後の漁業団体の歩みもそれに沿っている。

度重なる困難を乗り越えて漁業を鍛え、その成長を支えた人。菊田隆一は、曇りなき知性と人の結合で、理想の漁業を追い求めた人だった。